

## フジタ — 色彩への旅

ポーラ美術館(箱根・仙石原) 2021.04.17~09.05

本展は世界を旅した「フジタ」の色鮮やかな作品が集結していて注目される。「乳白色の肌」で知られる「藤田嗣治(レオナール・フジタ)」が描いた“鮮やかな旅の記憶”をテーマにして、欧州、中南米、北米からアジアへ 画家がとらえた風景を辿る企画として、「フジタ」の旅とそれに伴う色彩の変遷に焦点をあて、画伯の生涯の旅路と画業の展開をあらためて紹介している。

《メキシコに於けるマドレーヌ》 1934年 油彩/カンヴァス



「欧州と中央アメリカの対照」を狙った作品とされ、色白で白いドレスを着たモデルは、かえって青い瞳とドレスや帽子に添えられた赤が目を引き。そのドレスの部分はあえて即興的な粗いタッチで描かれ、カンヴァスの下地が見えるほどである。それとは対照的に、現地・メキシコのサボテンや赤い地面、特有の建築様式、そして空は鮮やかというよりむしろ濃厚に塗り込められている。

サーカス団の芸人と動物たち《町芸人》 1932年 油彩/カンヴァス



ブラジル・リオデジャネイで制作された作品の一つで、各地をまわる旅のサーカス団の周辺を描き、化粧をした二人のピエロを中心に、ポーズをとったブランコ乗りの少女、腕を組むレスラー、曲芸担当の動物が揃っている。

輪郭線を使わない濃厚な色彩と強調された油彩の質感で、客を呼び込む声に加えて動物や人の体臭まで漂ってきそうな画面である。新収載の作品としては、油彩画《坐

る女》(1921年)、《イヴォンヌ・ド・ダルスの肖像》(1927年)の2点と、連作「小さな職人たち」の中の《猫のペンション》(1959年)が展示されている。



尚、翠波画廊(京橋)で「藤田嗣治作品展」(04.12~24)が開催されている。